第４類

『草競馬』音楽教材としての活用法

～音楽表現力育成と音楽技能向上のための考察～

井本　英子
IMOTO Hideko

保育者養成及び教員養成課程においては学生の音楽技能を向上させ上達へ導くことと、その指導法を習得することを限られた授業時間の中で有効に学ぶための教材開発は欠かせない。本論文は幼児期の「表現」及び児童期の「表現」「音楽づくり」の授業において、第一に学生自らが音楽を表現し音楽づくりをしていく楽しさを感じる教材であること、第二に一緒に活動する友達の表現に触れ共感することができる素材であること、そしてその上でまとまりのある音楽に構成する音楽力を習得するための教材を『草競馬』(S.C.フォスター作曲)を題材にして考案、実践からの考察をするものである。

指導者の音楽表現力の育成と音楽技能向上を鑑みた有効な指導教材考案が本研究の目的である。

キーワード:『草競馬』、指導教材、音楽表現、音楽技能

1.　はじめに

幼児期の子どもたちが豊かな感性や表現する力を養うという領域「表現」の目的であるが、その内容として生活の中の様々な音を五感を通して感じ取り表現することや自分の感じたこと考えたことを思うままに表現することを楽しむこととなっている[1]。保育所保育指針の「表現」の内容としても音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむとなっている[2]。その子どもたちの表現に共感することが保育者の第一歩であるが、子どもたちの表現する音が繋がり音楽的に広がっていくとき、より楽しく、より美しく、より豊かにその感性を育む支援をしていくためには指導者自身の音楽表現力の豊かさが求められる。また児童期、小学校音楽科の「表現」や「音楽づくりの活動」においても、この指導者自身の音楽表現力の豊かさが求められる[3]。また、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」という領域「表現」の内容（６）を子どもたちと実践していくとき音楽を深く掘り下げて捉える音楽力が必要であり、小学校音楽科が担うべき教科としての役割を果たすためには指導者としての音楽技能の高さを求められる。保育者養成及び教員養成課程においてはどちらの場合も学生の音楽表現力を育てながら指導者としての高い音楽技能を習得することは必須である。そこで音楽表現力を主眼におきながらも様々な音楽技能を総合的に有効に習得するための教材を考案する。

今回は本学で2回生前期に演習・選択科目（1単位）として設定されている「保育内容・音楽表現Ⅰ」での授業実践を通して考察する。幼稚園教諭

二種免許状取得のための必修科目となっている。シラバスより授業のテーマ及び到達目標、授業の概要、全体の授業計画・内容を記す。

授業のテーマ及び到達目標

① 「幼稚園教育要領」の領域「表現」の内容とねらいを理解する。

② 幼稚園の音楽活動でよく使われる曲の季節・分野等を理解する。

③ 歌唱、弾き歌い、伴奏付け、打楽器の奏法、ボディ・パーカッション、合奏指導等の技能を習得する。

授業の概要

「幼稚園教育要領」の領域「表現」の内容とねらいを理解しその活動の重要性を学ぶ。季節や分野等理解して実践できるように教材研究。演奏を通じて楽曲指導に必要な力を身につける。

担当者別にグループに分かれて、個人レッスン及びグループレッスンを行い、下記の内容を毎時間総合的に学ぶ。曲目は、実技進度に応じて選曲する。

全体の授業計画・内容

1. 春休みの課題テスト、ガイダンス、授業方針の説明
2. 『幼稚園指導要領』の領域「表現」について
3. 歌唱（季節の歌・生活の歌・行事の歌・その他の歌）
4. 弾き歌い(季節の歌・生活の歌・行事の歌・その他の歌)
5. 歌あそび・手あそび
6. ボディ・パーカッション
7. コードネームとコード奏
8. 初見演奏・初見視唱
9. 打楽器合奏１（奏法）
10. 打楽器合奏２（いろいろな打楽器）
11. 打楽器合奏３（鍵盤打楽器）
12. 打楽器合奏４（ミュージックベル）
13. 動きと表現１(身体表現活動のための伴奏法)
14. 動きと表現２(身体表現活動のための変奏法)
15. 試験と振り返り

2. 題材について

『草競馬（The Camptown Races)』はフォスター作曲。(Stephen Collins Foster 1826～1864 アメリカ　ペンシルベニア州生まれ) 1850年にミンストレル･ショー(軽演劇)のために作られた[4]。日本では峯　陽氏の訳詞、野上　彰氏の作詞のものが一般に歌われている。

1. 娘たちが歌う　ドゥダー　ドゥダー
　５マイルの競馬場　オー！ ドゥダ　ディ
　帽子をかぶってきた ドゥダー ドゥダー
　ポケットいっぱい儲けるぞ
　オー！ ドゥダ　ディ
　夜昼を　駆けまわれ！
　短い尻尾の馬に　金をかけたよ

上記は峯　陽氏の訳詞の１番であるが，このように元々の内容としては子どもたちの歌としてはふさわしくない。野上　彰氏は子どもたちが歌えるように作詞している。

1. 町は大さわぎ　ドゥダー　ドゥダー
　今日は草競馬　はじまるぞ
　どこの馬だろう　ドゥダー　ドゥダー
　しっぽが短くて　おかしいぞ
　たのしいぞ　草競馬
　行こう行こうよ　早く　にぎやかに

2. 走れ　ころぶなよ　パッカ　パッカ
　陽気な楽隊は　プカプカドン
　行こう　子どもたち　ほら　ほら
　のんきな草競馬　はじまりだ
　たのしいぞ　草競馬
　行こう行こうよ　早く　にぎやかに

曲は４分の２拍子　　Ａ（ａ8小節　ａ8小節）Ｂ（ｂ4小節　ａ´4小節）の二部形式。１コーラス24小節だが２拍子なので長い印象ではない。和声は　ａは 主和音Ｉ－属和音Ｖで構成、ｂで　下属和音Ⅳが1小節でてくる。メロディは ａ´で経過的に音階の第4音が出てくるが全体はペンタトニックで音域は1オクターブ、リズムも軽快で捉えやすい。子どもたちが音楽あそびで歌うために『たのしいなかまたち』という歌詞（井本作詞）をつけている。子どもたちにとってはより馴染みやすく歌いやすい。

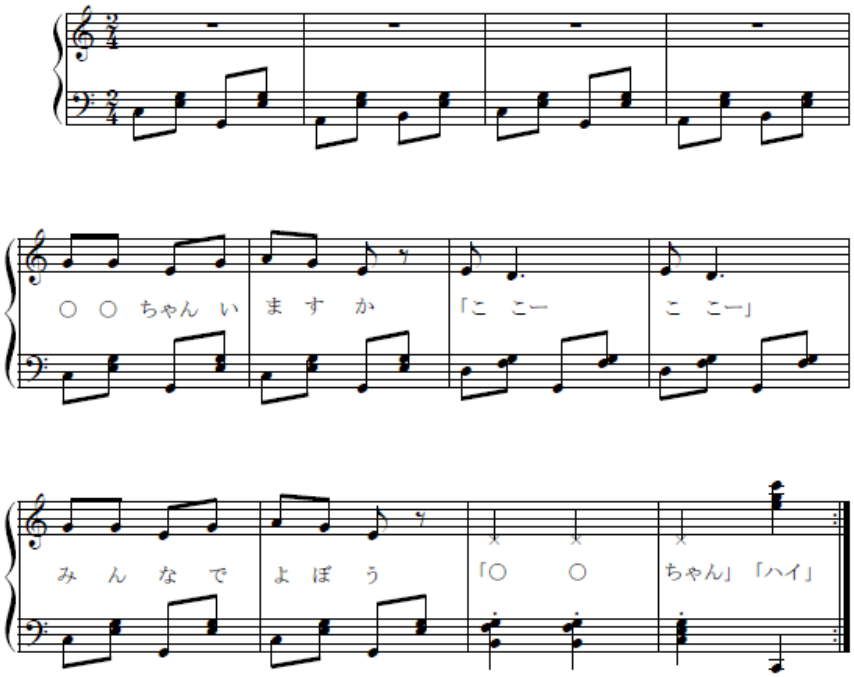
『たのしいなかまたち』

1.　にわとりの　おかあさん
　　コッコー　コッコー
　ひよこたちも　やってきて
　　ピヨピヨ　ピー
　あひるの　だいかぞく
　　クワックワッ クワックワッ
　ことりたちも　やってきて
　　ピッピ　ピピピー
　たのしいな　なかまたち
　さあ　みんなでうたおう
　ランララ　ランランラン

2.　すずめの　きょうだい
　　チュンチュン チュンチュン
　カラスも　やってきて
　　カー　カー　カー
　おしゃべり　ひばりが
　　ピーチク　パーチク
　こばとたちも　やってきて
　　ポッポ　ポッポッポー
　たのしいな　なかまたち
　さあ　みんなでうたおう
　ランララ　ランランラン

また拍の流れを感じながら拍の流れにのって手拍子を打ったり言葉を言ったりすることがねらいの音楽あそびとして、aの部分を繰り返して使う名前あそびをすることができる。（譜例１）

○○さん　いますか
『ここー　ここー』
みんなで　呼ぼう
『○○ちゃん』
『はい！』



（譜例―１）

3. 方法

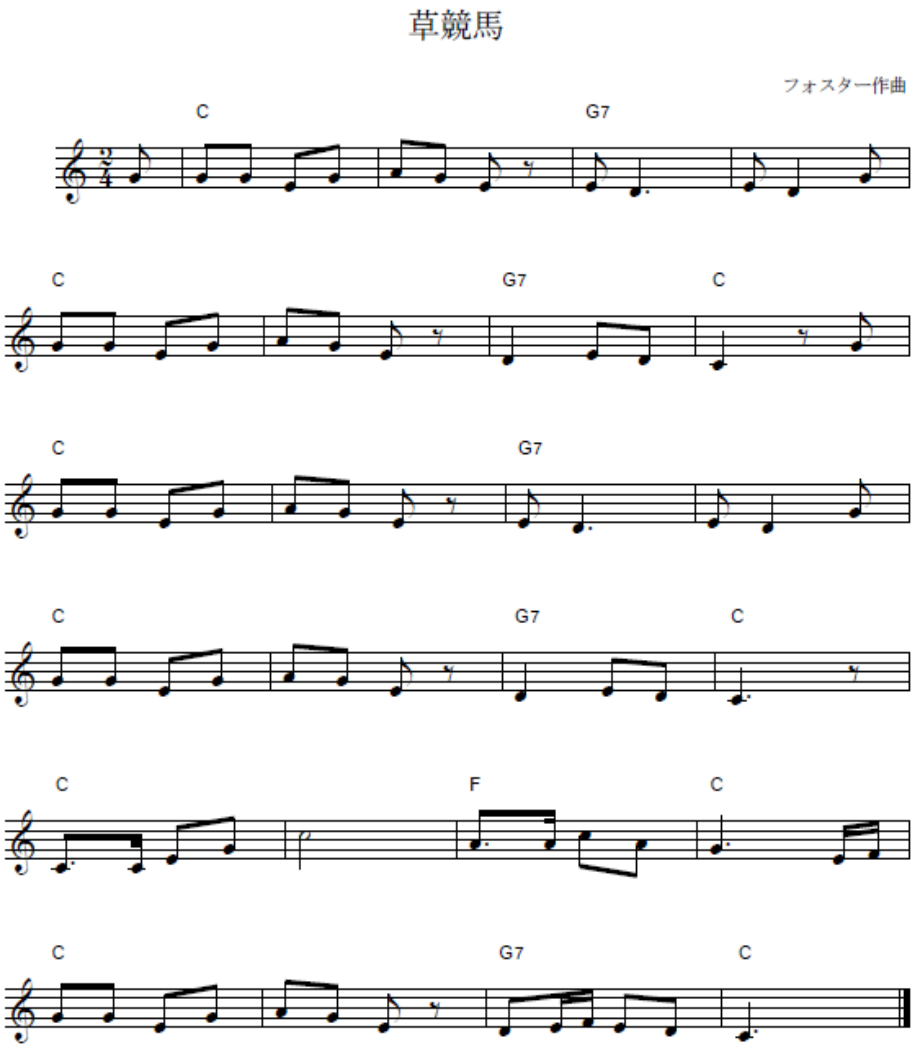
調査期間：平成29年前期期間中
調査対象：保育者志望短期大学２回生「保育内容・音楽表現Ⅰ」受講生156名
筆者は２クラス（53名）を中西京子教員と共に担当。他のクラスも同一教材で授業を展開。

4. 授業展開

4-1　授業の流れ

授業内容（前述シラバス）６.「ボディ・パーカッション」でリズム打ちや様々なリズムパターン、リズム譜の読み方等を学ぶ。

授業内容７.「コードネームとコード奏」でコードネームの基礎を学び、メロディをコード奏で伴奏したり、弾き歌いしたりすることを習得。その題材の一つに『草競馬』を用いた。学生はコード付きメロディ譜（譜例－２）を用いて各々のピアノ演奏技術に応じてコード奏での両手伴奏（伴奏例１－６）を学習。また、視唱（楽譜から音程やリズムや表情等を読み取って階名[ドレミ…]で歌うこと）の観点からも学習。各自が工夫したコード奏をしながら階名唱で弾き歌いすることを最終目標とした。



（譜例―２）

伴奏形を記した楽譜は無しに学生が自分のイメージや技量に合わせて自由に伴奏変奏を試みた。初心者の学生は〔伴奏例―１〕のように左手のベース音と右手の和音を同時に弾く伴奏形から始める。

次に〔伴奏例―２〕のように左手のベース音と右手の和音でリズムを感じられる伴奏形にアレンジする。

技術に応じてさらにリズミカルな表現になるように軽やかな後打ちの伴奏形のアレンジを推奨〔伴奏例―３〕。

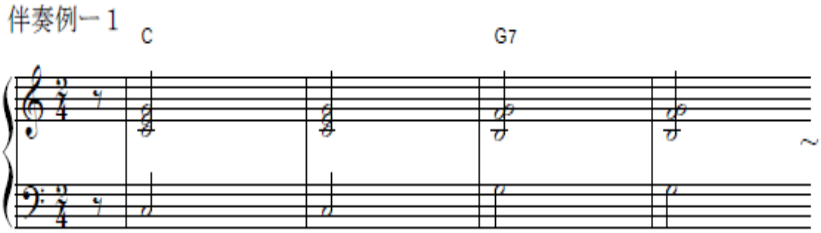
友達の演奏をお互いに聴きながらリズムに慣れると積極的にアレンジをしていた。

またオルタネーティングベース（コードのルート音と第5音を交互に奏するベースの弾き方）を習得した学生は〔伴奏例―４〕のアレンジで伴奏。更に楽しい雰囲気の曲になる。

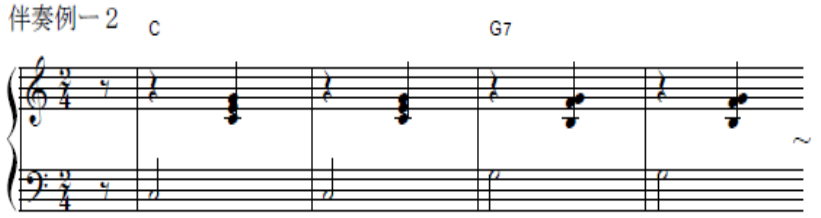
難易度は高いが〔伴奏例―５〕のように和音をパーカッシブに刻む形で弾くことにより華やかでリズミカルな伴奏による演奏をする学生もいた。

中間部（ｂ）は〔伴奏例―６〕のように（ａ）の部分とは異なる伴奏形にすることを推奨。短い曲の中でも伴奏形が変わることで音楽が立体的になることを実感。強弱もつけやすい伴奏形を使うことで表情豊かな演奏を目指した。

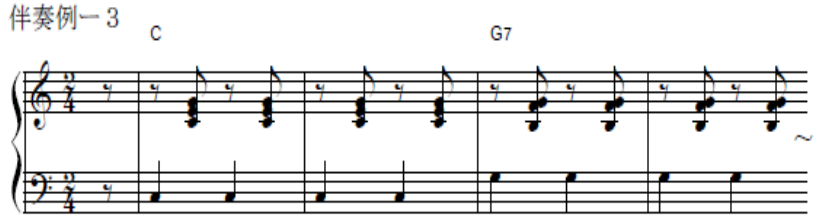
伴奏例―１



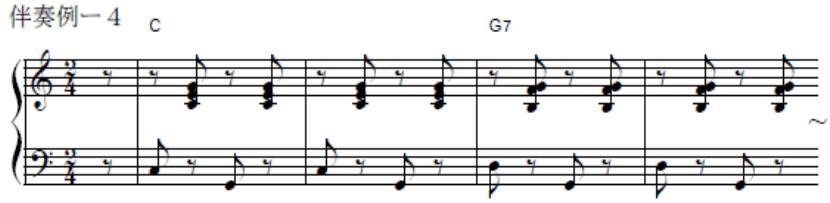
伴奏例―２



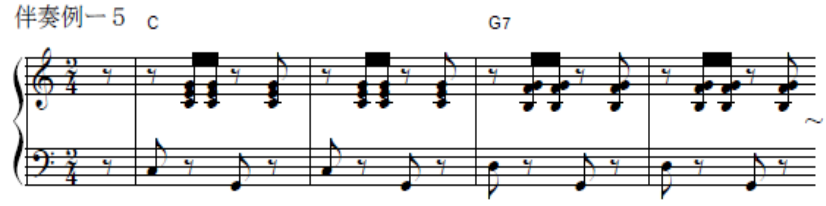
伴奏例―３



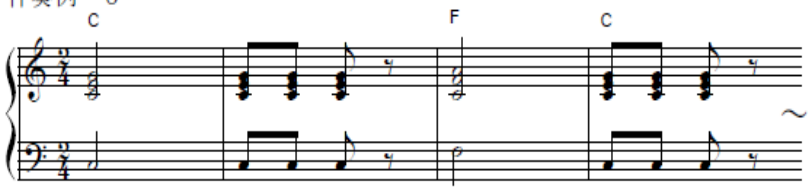
伴奏例―４



伴奏例―５



伴奏例―６



授業内容９.「打楽器合奏１（奏法)」、10.「打楽器合奏２（いろいろな打楽器)」で打楽器の基本奏法を学ぶ。楽器の種類は、タンブリン、カスタネット、スズ、トライアングル、ウッドブロック、大太鼓、小太鼓、コンガ、ボンゴ、クラベス、ビブラスラップ、マラカス、ギロ

授業内容11.「打楽器合奏３（鍵盤打楽器)」で木琴を学習。コード奏の階名唱でメロディは習得できているので『草競馬』のメロディ奏を題材にマレット奏法やトレモロ奏等学ぶ。

授業内容15.「試験と振り返り」
仕上げの打楽器合奏として実施。

4-2　仕上げの打楽器合奏の展開詳細

①　１クラスを１グループ６～８名で３グループ（A,B,C）に分ける。楽譜（譜例－３）を配布。

②　鍵盤奏は木琴パート[メロディ奏]と1人のピアノパート[コード伴奏]に分かれる。(譜例－３の木琴パート、ピアノパートのパート譜を配布。）授業内容７．及び11．の各回で各パート履修済みであるので短時間の復習で演奏できる。

③　パーカッションパート（per.）は９パート分ある。per.１とper８は音程の差異が出る楽器（例えばウッドブロック、アゴゴ、ボンゴ等）を使う。Per２～７、９は一段に記譜されているものを上下のパートに分かれて別の楽器で奏する。全部のパートをメンバーで分けて奏してもよいし、特定のパートを省いてもよい。また一人が複数の楽器を担当（例えば譜例－３の[A]~[C]はper３をカスタネットでper８をアゴゴで奏し、[D]はper８のみ奏しper３は省く）など、グループの求める音楽や人数によって楽器編成や構成人数を工夫する。

④　譜例－３[F]～[I]はパーカッションによるリズム創作。木琴のメロディの問いに答える形でパーカッションとの掛け合いが４回ある。各パート１回は担当。各自でリズムを創作した上で、楽器の組み合わせや演奏順や全体の表情等を工夫して音楽をまとめていく。

⑤　発表方法

	Aグループ	Bグループ	Cグループ
発表１回目	鍵盤奏	聴く	打楽器奏
発表２回目	打楽器奏	鍵盤奏	聴く
発表３回目	聴く	打楽器奏	鍵盤奏

4-3　学ぶポイント

①　楽器の選択とパート分け
リズムパターンにふさわしい楽器を選び、人数も考えて編成を考える。

②　リズム創作
担当楽器を活かしたリズムを自由な発想でつくる。テンポ、バランス、強弱など全体の流れを聴いて自分たちの求める音楽に高めていく。

③　他のグループの演奏を聴く
同じ題材でも楽器の選び方や演奏の仕方で音楽の表情が変わることに留意して聴く。

（写真１　打楽器奏の様子）

（写真２　左側木琴奏の様子）

（写真３　発表の様子）

5.　結果と考察

今回の授業では2クラスとも時間の制約と合奏経験の乏しさから、各々が自分のパートを止まらずにミスをしないように演奏し終えることで精一杯であり演奏を高める喜びを実感するには至らなかった。特に鍵盤奏パートと打楽器奏パートを合わせていく過程は音楽的な高まりを実感しやすいところであるがグループの人数や楽器・教室環境等の理由からその時間を取れなかった。それ故に自分たちの全体の演奏を聴いて部分を修正したり演奏力を高めたりすることでより豊かな音楽になっていく過程を実感することはできていなかった。

即興的なリズム創作活動は様々な発想が出て楽しみながら工夫をしてまとめていた。もう少し長いフレーズの創作を課題にしたらますます積極的な表現活動を楽しむであろうと感じた。自分の作った音を一曲の音楽の中に入れて発表するという創作活動の経験は、子どもたちが自ら考え表現した音を一つの音楽にまとめて作品として完成させていく音楽創作の手掛りになる。しかしそれを五線譜に表記する作業はとても難しい。幼児教育の中では楽譜製作の必要性は低いが、読譜力向上の観点からも楽譜製作に繋がる技能も効果的に習得できる課題を考えていきたい。

今回、最終仕上げの創作付き合奏はグループ分けから仕上げまで60分、発表・振り返りが30分という1コマのスケジュールで実践できた。最終仕上げの合奏は、短時間であったにもかかわらず授業最終回までに学生たちが積んできた『草競馬』の様々な音楽体験によって音楽的なまとまりを持った質の高い表現として発表された。本教材は楽譜としては合奏譜であるがこの１曲に階名唱、コード奏、弾き歌い、鍵盤打楽器（木琴）奏、打楽器奏、創作、記譜、合奏の要素が含まれている。上記各要素を『草競馬』だけで学ぶわけではないが系統的に学ぶことで皆が有効な音楽体験を積んだといえる。

音楽を豊かな表現で奏するためにはその楽曲を深く捉えることが不可欠である。捉え方は各自のそれまでの音楽経験や感受性によって差異があるわけだが、授業で学ぶ楽曲を皆が深く捉えるためには、その楽曲を使って様々な音楽体験を積むことが有効である。限られた授業時間内で有効な音楽体験を考えるとき指導者は教材として用いる題材を多角的に捉えて種々の項目に付加価値をつけて展開することがその手立てとなるといえる。

6.　まとめと今後の課題

『草競馬』を使った音楽あそびの展開を今回の授業の中では扱えなかった。『草競馬』での様々な音楽あそびを体験してイメージを膨らませてから伴奏付けに進むと学生たちの演奏はもっとスムーズで更に発想豊かな表現になると思われる。保育の現場では音楽あそびから導入して展開する方が有効であるのでそのつながりも学べるように授業カリキュラムに組み込みたい。その上で合奏としての音楽表現を質の高いものに習熟していく過程をより感じられる授業展開方法をさらに検討していきたい。

この授業で『草競馬』を学んだ学生たちが、オープンキャンパスで訪れた高校生たちに助言をしながら一緒にアンサンブルを楽しんでいた。楽譜がなくても自分たちでその時の状況に合わせてできるアンサンブルのレパートリーとして『草競馬』を身につけていたと感じた。

7. 引用文献・参考文献

[1] 文部科学省『幼稚園教育要領』(平成29年３月)
[2] 厚生労働省『保育所保育指針』(平成29年３月)
[3] 文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』(平成20年６月)
[4] 新音楽辞典　人名　音楽之友社　(平成6年第9刷)

ピアスーパーバイザーからのコメント

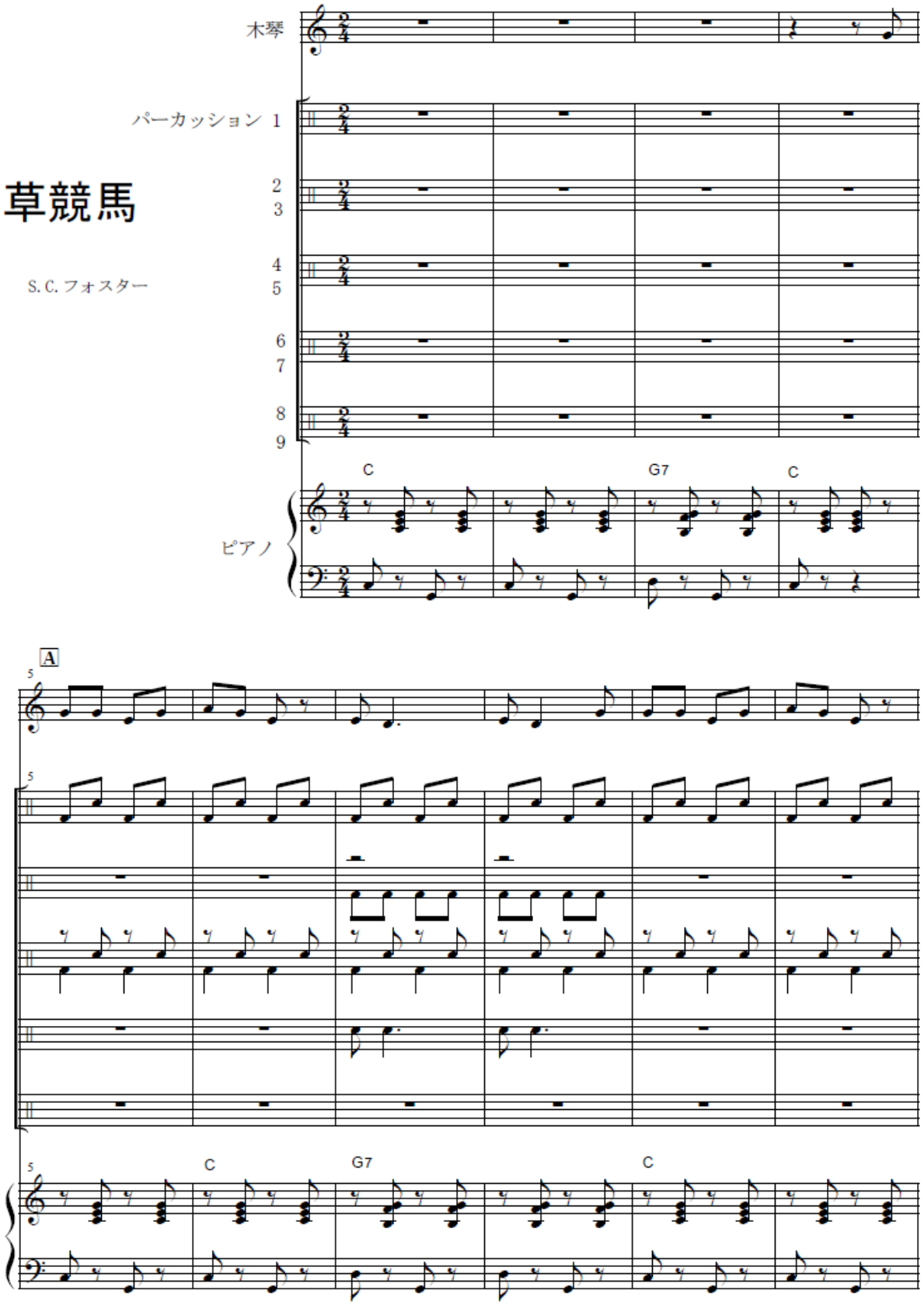
本稿は、「保育内容・音楽表現Ⅰ」の授業における実践報告でした。授業者は、「草競馬」という軽快な曲を題材として用い，指導者としての技能及び表現力の向上につながるような工夫をされていました。教材の選択がよければ，受講者の授業に取り組む姿勢も向上します。学生は、受講することにより、音楽の楽しさを伝える術を見出せたのではないでしょうか。

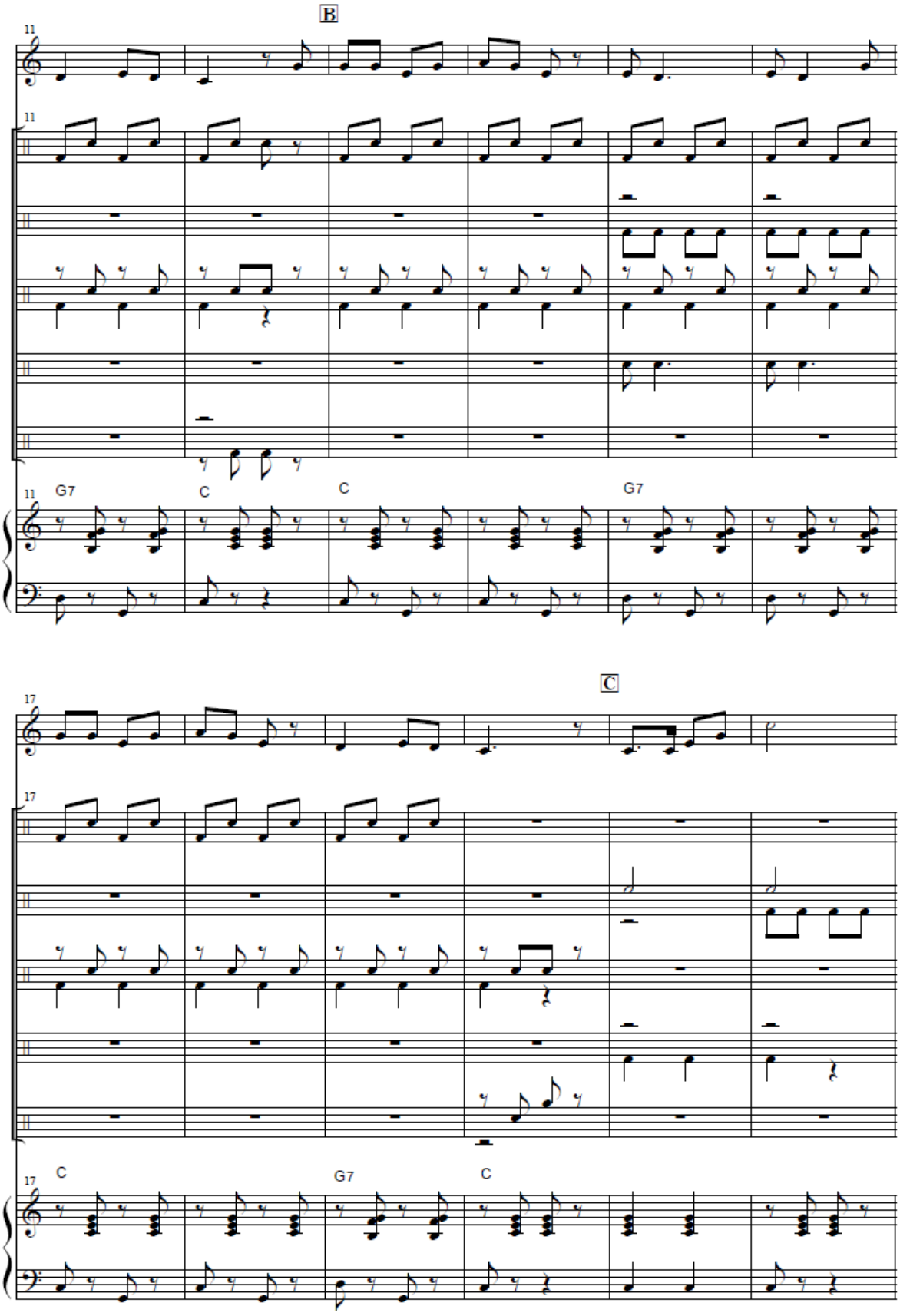
子どもに音楽の楽しさを伝えるには、指導者としての感性を磨くことも必要です。楽しいと思える曲との出会いは、感性を揺さぶる経験になります。音楽を楽しいと感じる感性のアンテナも必要です。受講者は、この授業の中で、音楽の楽しさを十分味わえたことでしょう。

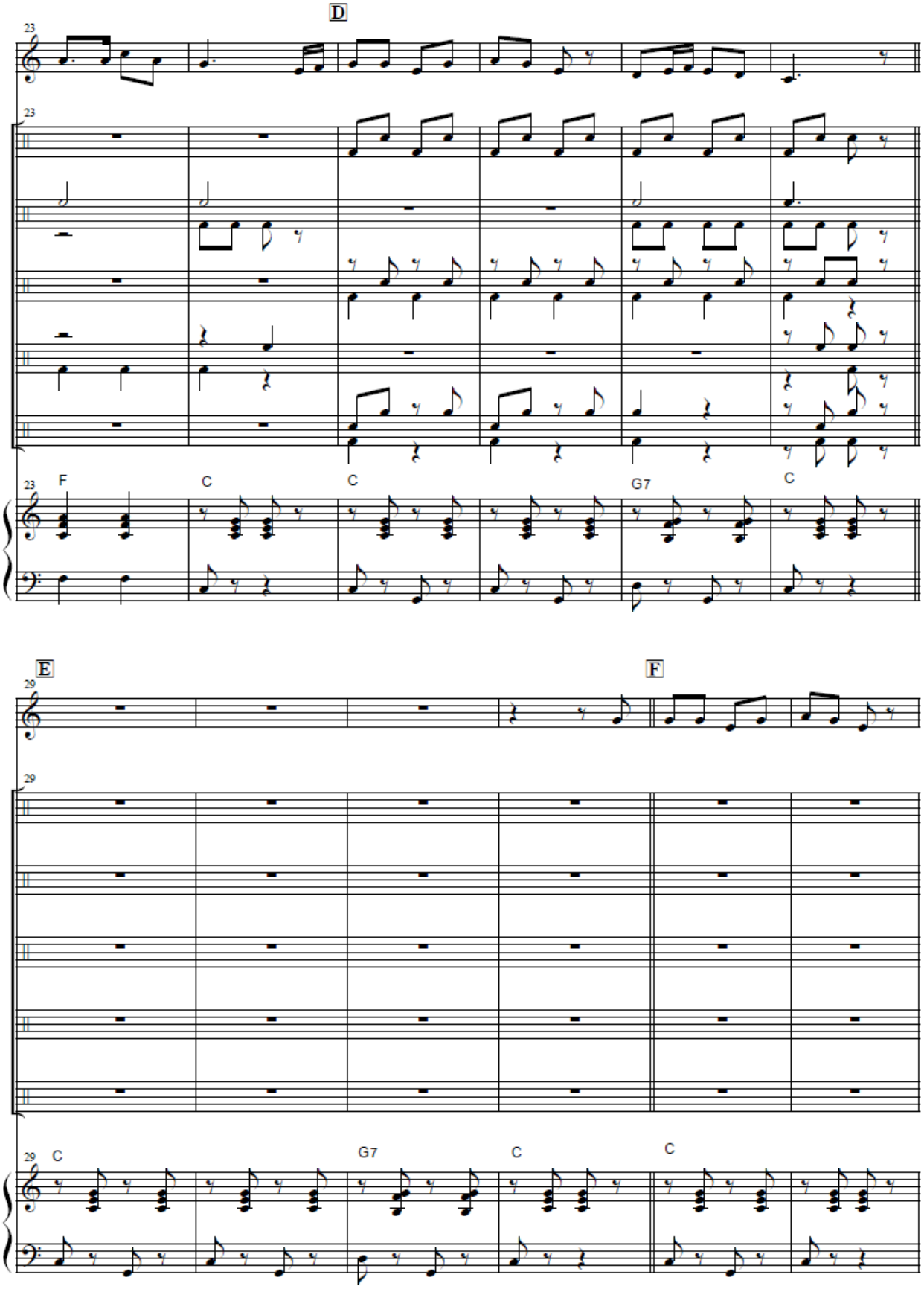
保育や教育の現場では、発表会等の行事において、音楽技能に傾倒した指導を行いがちです。これは、本来の音楽の楽しさを奪いかねません。まず、指導者が音楽を楽しむこと。そこから、楽しさが子どもへ伝染し、様々な表現活動へつながることになります。楽しさがなければ、表現活動につながることはありません。指導者は、そのことを認識しておかなければなりません。その意味でも、本報告の知見は、保育者・教員養成校の先生方や、子どもへの音楽指導に携わる先生方に共有されるべき知見が示されたと思います。

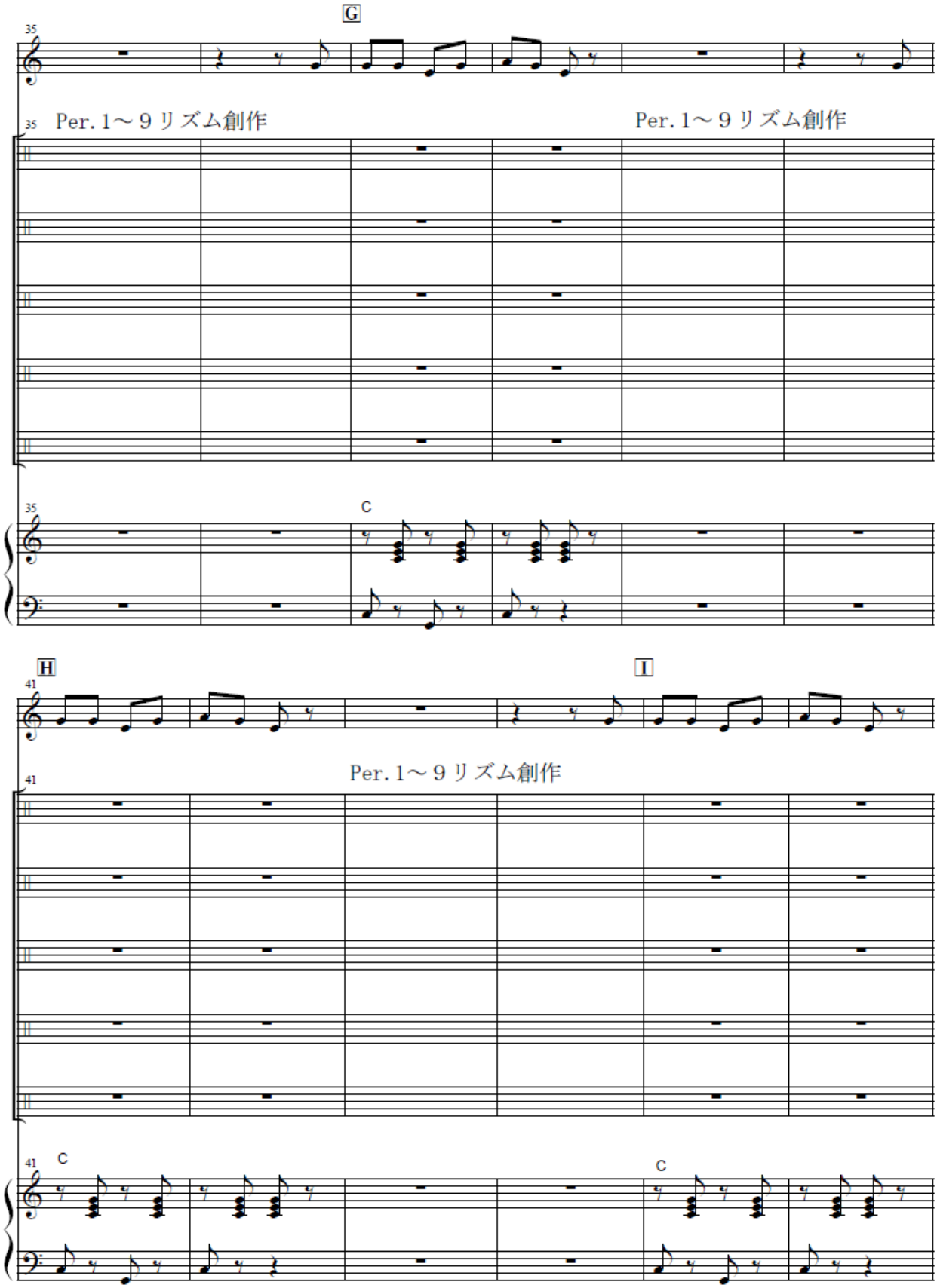
（担当：園田　雪恵）

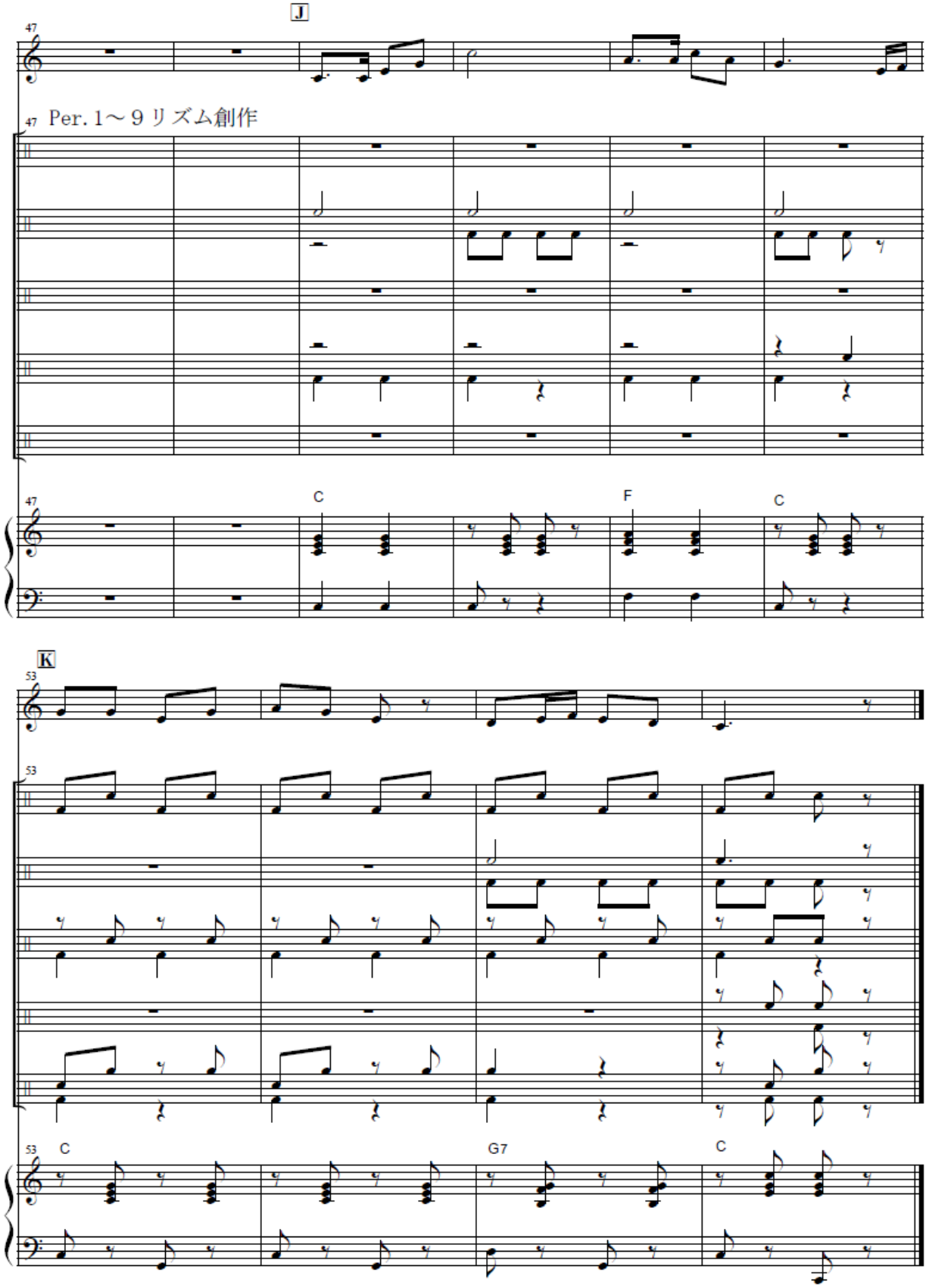
（譜例―３）




B
11
G7
C
C
G7
C
17
C
G7
C


D
23
F
C
C
G7
C
E
F
29
C
G7
C
C


G
35
Per. 1～9 リズム創作
Per. 1～9 リズム創作
C
H
I
41
Per. 1～9 リズム創作
C
C


J
47
Per. 1～9 リズム創作
C
F
C
K
53
C
G7
C